

高い生産性・収益性の実践と多様なニーズに応えられる かごしま黒豚の生産を目指して



有限会社 黒木養豚
(くろきようとん)
鹿児島県肝属郡肝付町

推薦理由

当経営では、母豚 125 頭のパークシャー種一貫生産により、ブランド「かごしま黒豚」の生産効率と品質の向上を目指し、優良種豚の整備を行い、分娩頭数の増加、哺育・育成率の向上、増体量や飼料要求率の改善、衛生対策に留意した飼養管理技術の改善により収益性の向上を図るとともに、積極的な組織活動を通じて地域と共存した養豚経営を実践している。

グループ活動は、養豚農家の後継者で組織する「豚豚倶楽部」のリーダーとして研修会・交流会の実施、農業祭での宣伝販売会や消費者との交流会の開催、養豚以外の他部門農業者（肉用牛・たばこ・果樹・園芸農家など）との勉強会や交流会への参加、遊漁船組合員として地元海岸の美化活動に参加するなど、地域住民と一体となって幅広い社会活動を行っている。

養豚経営の取り組みでは、昭和 41 年から果樹経営に養豚を取り入れ、以降、建築コストを引き下げるため手作り豚舎等による飼養規模の拡大、有限会社の設立、後継者への経営移譲、産直黒豚への取り組みなど、着実に実行に移し経営基盤を築き上げてきている。

飼養管理では、パークシャー種が高品質であるが、大型種に比べると生産性が低いことを十分理解し、日照時間の確保による発情再帰日数の短縮、緑餌給与による産子数の増加、分娩子豚の看護による損耗防止と肥育豚舎での適正な飼養密度の確保による疾病・ストレス防止などの飼養管理により、繁殖・肥育部門の主要な項目の実績は、パークシャー種としては出色の成績である。

また、生産した「かごしま黒豚」の銘柄を差別化商品として確立するため、「かごしま黒豚ブランド産地指定基準」に従い、こだわりの「かごしま黒豚」の生産をすすめ、飼養管

理技術の向上と品質・斉一性の向上に積極的に取り組み、また、新たな産直取引では取引先のニーズに合わせた生産を実施することにより大きな信頼を得るなど、消費者に好まれる美味しい豚肉づくりに努めてきている。

養豚経営の成果は、繁殖・肥育部門の飼養成績の向上を図りつつ、ブランド「かごしま黒豚」の生産に加え、取引業者からのニーズに合わせた産直黒豚の取り組みなど、一層の銘柄化の促進による売上額の増加と、コスト低減による所得の増加を図るなど、これまで実行してきた取り組みと優れた技術・経営成果が高く評価された。

(鹿児島県審査委員会委員長 梶 哲郎)

発表事例の内容

1 地域の概況

1) 肝付町^{きまつき}は、鹿児島県大隅半島のほぼ中央東南部に位置し、総面積 308.12 km²、人口が約 1 万 8,000 人の町であり、気象条件は、年平均気温 17℃前後で、降水量は 3,000mm と極めて温暖多雨な気候である。

2) 主な農産物は、肉用牛、豚、甘藷、野菜、米、果樹などで、特に畜産部門は農業産出額の 6 割を占め、町内の基幹作物になっている。中でも養豚産業は、農業産出額の 33% を占め、個人農家養豚や会社系養豚が地域内に 23 農場が存在している。

3) 肝付町には有名なものが 3 つあり、1 つめは「一反木綿 (いったんもめん)」である。朝の NHK 連続ドラマ「ゲゲゲの女房」でも登場する一反木綿は、経営主の近くの権現山の妖怪である。これは、文豪夏目漱石の弟子で肝付町出身の野村伝四先生が、昭和 16 年に「大隅肝属郡方言集」という本に掲載したことが水木先生の目にとまり、デザインされたものである。

2 つめは、7 年ぶりに地球に帰還したことで有名な「はやぶさ」である。このはやぶさは、肝付町の内之浦航空観測所で打ち上げられた。そのため、JAXA (宇宙航空研究開発機構) の関連施設のある 6 市町 (鹿児島県肝付町・神奈川県相模原市・北海道大樹町・秋田県能代市・岩手県大船渡市・長野県佐久市) では、相互の特産物等の販売協力や地域交流を行う「銀河連邦経済交流」を行っている。

3 つめは、肝付町内の高山地区で約 900 年続く「流鏝馬 (やぶさめ)」である。肝付町は島津家から徳川第 13 代将軍・徳川家定に嫁いだ篤姫の幼馴染の小松帯刀の祖先の肝付氏の本拠地の城跡が今も残っており、この流鏝馬は鎌倉時代から続き、五穀豊穡を願って毎年 10 月に開催されるもので、例年大勢の観光客が詰め掛ける町の一大行事である。

2 経営・生産活動の内容

1) 労働力の構成（平成 21 年 5 月現在）

区分	経営主との続柄	年齢	農業従事日数（日）		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
構成員	本人	41	300	300	養豚全般	役員
	父	67	100	100	畜舎等補修・建築	役員
	母	64	250	250	ストール舎・分娩舎・離乳舎の清掃、洗浄、消毒 肉豚舎の清掃	
	弟	36	300	300	分娩舎・離乳舎の飼養管理全般	役員
	妹	39	250	250	経理事務	
従業員	男性	41	280	280	肉豚出荷、豚の移動、糞尿処理、離乳舎の洗浄	
臨時雇	男性（パート勤務）			延べ 200 人日	豚舎清掃、畜舎等補修・建築	

2) 過去 5 年間の生産活動の推移

	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年
畜産部門労働力員数（人）	7	7	7	7	7
飼養頭数（頭）	母豚 130	母豚 130	母豚 130	母豚 132	母豚 125
販売・出荷量等（頭）	1,940	2,089	2,081	2,112	2,117
畜産部門の総売上高（円）	90,335,937	99,803,597	90,954,856	104,903,815	122,882,690
主産物の売上高（円）	89,432,578	98,805,561	90,045,307	104,186,688	122,305,887

3) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成20年6月～平成21年5月）

経営の概要	労働力員数		家族・構成員	3.3 人	
	(畜産部門・2000時間換算)		雇用・従業員	2.0 人	
	種雌豚平均飼養頭数			125.2 頭	
	肥育豚平均飼養頭数			1,195 頭	
	年間肉豚出荷頭数			2,117 頭	
収益性	養豚部門年間総所得			38,774,852 円	
	種雌豚1頭当たり年間所得			309,818 円	
	所得率（構成員）			31.6 %	
	種雌豚1頭当たり	部門収入			981,853 円
		うち肉豚販売収入			959,219 円
		売上原価			710,117 円
		うち購入飼料費			456,877 円
		うち素畜費			4,734 円
うち労働費			97,116 円		
うち減価償却費			39,627 円		
生産性	繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.16 回	
		種雌豚1頭当たり分娩子豚頭数		21.2 頭	
		種雌豚1頭当たり子豚離乳頭数		18.5 頭	
	肥育	種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数			16.9 頭
		肥育豚事故率（対常時頭数）			8.9 %
		肥育豚事故率（対出荷頭数）			5.1 %
		肥育開始時（離乳時）	日齢		28 日
			体重		8 kg
		肉豚出荷時	日齢		249 日
			体重		119 kg
		平均肥育日数（離乳～出荷）			221 日
		出荷肉豚1頭1日当たり増体量（離乳～出荷）			0.501 kg
		肥育豚飼料要求率（離乳～出荷）			3.49
		トータル飼料要求率			3.99
		枝肉重量			75.6 kg
		販売価格	肉豚1頭当たり平均価格		59,994 円
			枝肉1kg当たり平均価格		752 円
枝肉規格「上」以上適合率			59.1 %		
出荷肉豚1頭当たり差引生産原価			41,709 円		
種雌豚1頭当たり投下労働時間			84.7 時間		
安全性	総借入金残高（期末時）			8,862,953 円	
	種雌豚1頭当たり借入金残高（期末時）			70,790 円	
	種雌豚1頭当たり年間借入金償還負担額			9,217 円	

4) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	すべて分離
処理方法	<p>①固形分の処理（堆肥化処理）</p> <p>ストール豚舎・分娩舎・離乳豚舎・子豚舎・肉豚舎はすべてスクレパーでふん尿分離し、分離された固形分は、ショベルローダーでパドル式堆肥舎へ送り堆肥化処理され、製品置き場で保管している。</p> <p>②液体（尿・汚水）の処理</p> <p>分離された汚水は原料槽でいったん貯留されたあと、沈殿槽1と沈殿槽2で汚泥を沈降させ、上澄みを曝気槽1と曝気槽2と曝気槽3で間欠曝気を行い、上澄みを最終沈殿槽へ送る。</p> <p>最終沈殿槽からの放流基準値以下に処理された処理水（放流基準値 BOD90ppm、SS100ppm、大腸菌群 3,000 個/ml以下）は、さらに水草の生えた自然浄化用の池に流れ、その後川に放流している。沈殿槽等の汚泥は適宜引き抜き、振動スクリーンの粕とともに、堆肥舎へ送り、堆肥化している。</p> <pre> graph TD A[畜舎] --> B[原料槽] B --> C[振動スクリーン] C --> D[沈殿槽 1・2] D --> E[曝気槽 1・2・3] E --> F[最終沈殿槽] F --> G[自然浄化用の池] G --> H[川へ放流] </pre>
敷料	なし

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
販売				
交換				
無償譲渡	80%	近隣耕種農家等		
自家利用	20%	自給飼料畑等		

3 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和41年	養豚+果樹	種雌豚 6 頭		父がパークシャー種繁殖経営開始・果樹 20a
〃 46年	養豚+果樹+造園	種雌豚 20 頭		徐々に規模拡大し 20 頭規模、造園業開始・果樹 20a から 40a に拡大
〃 48年	養豚+果樹+造園	種雌豚 30 頭		パークシャー種から大型種繁殖経営へ転換
〃 52年	養豚+果樹	種雌豚 30 頭		繁殖経営から一貫経営へ転換、果樹 40a から 70a へ拡大。
〃 58年	養豚+果樹	種雌豚 30 頭		造園業をやめる
〃 62年 1 月	養豚+果樹	種雌豚 45 頭		徐々に規模拡大し 45 頭規模
〃 62年 7 月	養豚+果樹	種雌豚 60 頭		後継者として経営主が就農、種雌豚 15 頭を導入し規模拡大、手作りによりストール舎を新築
〃 63年	養豚+果樹	種雌豚 60 頭		肉豚舎 (368 頭収容) を手作りにより新築、果樹 70a から 60a へ縮小
平成 3 年	養豚+果樹	種雌豚 60 頭		密飼い・事故率低減のため離乳舎 (120 頭収容) を手作りにより新築
〃 6 年	養豚+果樹	種雌豚 80 頭		種雌豚 20 頭を導入し規模拡大、ストール舎 (36 頭収容) を手作りにより新築
〃 7 年 1 月	養豚+果樹	種雌豚 110 頭		次男が就農、種雌豚 30 頭を導入し規模拡大、ストール舎 (36 頭収容) を手作りにより新築
〃 7 年 10 月	養豚+果樹	種雌豚 110 頭		希少価値があるパークシャー種への魅力を感じ、パークシャー種の雄 1 頭・雌 3 頭を導入し、大型種からパークシャー種への切り替えを開始する。分娩舎 (20 頭収容) を手作りにより新築。
〃 8 年	養豚+果樹	種雌豚 110 頭		離乳舎 (420 頭収容) を手作りにより新築
〃 9 年	養豚+果樹	種雌豚 110 頭		肉豚舎 (176 頭収容) を手作りにより新築 果樹を 40a に縮小 県単事業で糞尿処理施設を整備
〃 11年	養豚+果樹	種雌豚 110 頭	10a	平成 7 年より徐々に大型種の更新用として、パークシャー種の繁殖性の優れたものを中心に自家保留と一部外部導入を実施し、パークシャー種専門一貫経営へ転換。 肉豚舎 (176 頭収容) を手作りにより新築 有限会社を設立
〃 12年	養豚+果樹	種雌豚 110 頭	10a	父が経営主に経営全般の管理を任す。
〃 13年	養豚+果樹	種雌豚 110 頭	10a	離乳舎 (255 頭収容) を手作りにより新築
〃 15年	養豚+果樹	種雌豚 130 頭	10a	徐々に規模拡大し、130 頭規模。 従業員を 1 人雇用。
〃 16年	養豚+果樹	種雌豚 130 頭	10a	肉豚舎 (オガコ豚舎 255 頭収容) を手作りにより新築
〃 18年	養豚	種雌豚 130 頭	10a	分娩舎 (20 頭収容) を手作りにより新築 神奈川県が黒木養豚の黒豚に惚れ込み産直を開始 (年間 240 頭程度) 県枝肉共進会で九州農政局長賞受賞 (有) 黒木養豚が認定農業者に認定
〃 21年	養豚	種雌豚 125 頭	10a	大阪府の業者からの依頼により黒豚の熟成豚の産直開始
〃 22年	養豚	種雌豚 110 頭	10a	離乳舎 (560 頭収容) を手作りにより新築

4 経営・生産活動の内容

当経営は、バークシャー種の高品質であるが大型種に比べると生産性が低いことを十分に理解しながら、家族全員がバークシャー種を大切に丹精込めて育てるという高い意識と、高度な飼養管理技術のもと、かごしまブランド産品である「かごしま黒豚」のほか、大きな信頼を得ている産直取引に自信と責任を持ち取り組んできている。

1) 飼養管理技術（繁殖）

- (1) 母豚カード・管理日誌等により、種付け・分娩・離乳・疾病の状況等が一目でわかるように個体管理とチェックの徹底を実施している。日常、記録記帳した管理日誌は、養豚経営管理ソフト（ピックス）に入力し、定期的に経営内の検討会で改善点等について十分検討している。また、徹底した日常の記録記帳に加え、最近では妊娠鑑定機を導入し、早期の受胎確認を行う等、繁殖成績が更に向上している。
- (2) 分娩時は全頭分娩看護を実施し、未熟産子への哺乳はもちろん、里子の実施、仮死状態の子豚は人工呼吸の実施など、産子数の少ないバークシャー種の特徴から子豚の損耗防止に努めている。
- (3) 種雌豚および種雄豚の良好なボディーコンディションの維持、産子数や母乳量の増加を図るために、冬作はイタリアングラス、夏作はローズグラスを緑餌として年間毎日給与している。（離乳～種付前までは400～600g／1頭、種付後～84日齢までは200～300g／1頭、85日齢～分娩時まで400～600g／1頭の給与）
- (4) 種雌豚の発情再起の短縮、種豚のストレスの軽減等を図るために、日照に加えタイマー式でAM7:00～PM8:00まで1年を通して電照（太陽光に近い電球を使用）することにより、日照時間を十分確保している。また、そのことにより流産も減少している。
- (5) 分娩舎では、カーテン・換気扇を使用し、換気および温度・湿度の畜舎内環境を良好に保持するとともに、暑熱対策として室温17℃以上の場合は滴冷を使用し、種雌豚の体温調整を実施している。
- (6) 種雌豚の分娩舎への移動（分娩前9日前）時には、疾病の母子感染防止のために、種雌豚を蹄の先まで徹底的に洗浄し、ブラッシング消毒した後、移動している。
- (7) 県経済連の衛生クリニックを毎年2回実施し、常に防疫体制のチェックを行い、農場の清浄化を図っている。また、導入先も疾病の状況を見極めて選定し、外部導入豚・自家保留豚もPRRS・AD等の検査を実施し、陰性の豚を導入している。そのため、農場内はサーコ・PRRSはフリー、ADに関しても定期的な検査により、野外ウイルスは確認されておらず、その他の疾病についても良好にコントロールされている。
- (8) バークシャー種の特徴を十分理解した上で上記のような基本に忠実で、細かい飼養管理技術かつ様々な工夫で経営努力を行い、1腹当たり哺乳開始頭数9.0頭（診断平均8.5頭）、1腹当たり離乳頭数8.5頭（診断平均7.7頭）、分娩回数2.16（診断平均2.08）、育成率94.5%（診断平均90.4%）と優れた繁殖成績である。

2) 飼養管理技術（肥育）

- (1) 離乳後は、子豚のストレスの軽減、良好な発育等を図るために雌雄別飼いを実施している。
- (2) 肉豚舎では夏場の暑熱対策、年間を通しての湿度管理のため、滴冷を使用している。また、滴冷に加えて、天候に応じてカーテン等により換気および温度・湿度の畜舎内環境を良好に保持している。
- (3) 多様なニーズに対応すべく、取引先別の適正出荷を図るため、出荷時は体重測定を実施している。
- (4) 密飼いによる疾病・ストレス・事故を軽減するため、数回にわたり手作りで離乳豚舎・肥育豚舎を新築したことにより収容能力を増やし、現在は子豚1頭当たりの面積は0.6 m²/頭、肥育豚1頭当たりの面積は1.3 m²/頭と、余裕をもったスペースで飼養管理している。
- (5) 従来のかごしま黒豚の生産に加え、取引先のニーズに対応した枝肉重量の大きい産直豚の生産を行っているにもかかわらず、上記のような細かい飼養管理技術かつさまざまな工夫で経営努力を行い、種雌豚1頭当たり肉豚販売頭数16.9頭（県内診断結果平均13.9頭）、対出荷頭数事故率5.1%（同平均10.3%）、種雌豚1頭当たり枝肉生産量1,264kg（同平均1,014kg）、1日当たり増体量523g（同平均488g）、農場要求率3.99（同平均4.01）と優れた肥育成績である。

3) 経営管理・コスト・収益性

- (1) 当経営は無理なく計画的に種雌豚の改良をしながら規模拡大を図っている。また、規模拡大に伴う施設等は、父が管理・作業しやすいように工夫しながらすべて手作りで新築・増築することによりコスト低減を図っている。
- (2) 機器等修理についてもほとんど父が修理を行い、コスト低減を図るとともに外部からの立ち入りをなくすことで疾病侵入を防いでいる。
- (3) 平成11年に家族5人従業員2人の法人化により、業務分担と給料制を取り入れ、責任の明確化と法人経営の管理能力の向上に努め、社会保険制度や休暇制度など就業環境の整備を図ってきている。
- (4) 当経営は、無理なく計画的に規模拡大を進め、高い飼養管理技術で安定した生産基盤を確立したが、その背景にはJAが行う定期的な巡回指導や検討会の開催、農業経営者の研修会へ参加するなど、肝付町とJAの積極的な支援が現在の経営基盤作りに大きく役立っている。
- (5) 枝肉1kg当たり総原価は645円（家族労働費を除くと596円）で、診断平均（747円、613円）より低コストとなっている。その要因は経営の特徴に記載している通り、優れた繁殖成績に加え、離乳後の子豚・肥育豚の事故率が低かったことが種雌豚1頭当たり肉豚販売頭数16.9頭（診断平均13.9頭）を達成していること。また、日々発生する経営費用のチェックを行うなど、経営全般的にコスト低減に努めていることが挙げられる。

(6) 養豚所得は 3,877 万 5,000 円で、種雌豚 1 頭当たり 30 万 9,000 円、所得率 31.6%と診断平均 (21 万 7,000 円、26.9%) より大変優れた成果となっている。その要因は、常に黒豚の肉質にこだわった生産体制にあり、産直取引先から絶大な信頼と評価を得るなど枝肉 1 kg 当たり 752 円 (診断平均 714 円) で販売価格が高いこと。また、種雌豚 1 頭当たり肉豚販売頭数 16.9 頭を達成するなど、販売部門と飼養管理技術部門が所得に大きく反映し、水準が高い。

4) こだわりの豚肉生産

(1) こだわりの豚肉生産のもととなる種雌豚は、「産子数が多いもの・発育がいいもの」を自家保留している一方、血縁関係も考慮しながら種雄豚・種雌豚も計画的に導入することにより、優良種豚の整備を図っている。また、種雄豚を導入する場合には、特に体型 (後脚の腱の太さ・弾力性、睾丸の大きさ、乳頭数 7 対のみ、体長) にこだわり導入している。

(2) 飲料水はミネラル分が非常に豊富な大隅半島の南東に位置する国見山麓から湧き出る豊富な湧水 (水質検査済み) を活用しており、農場内の豚の状態が大変良好であり発育もよい。

(3) 当経営は、消費者が求める安全でおいしい黒豚肉の生産促進と「かごしま黒豚」の銘柄確立のために設立された、鹿児島県黒豚生産者協議会の会員となっており、同協議会が定めた基準に従い、「甘しょ (さつまいも)」を 10% 含んだ飼料を給与するなど、品質の向上に努めている。また、「かごしま黒豚」は、同協議会が発行するかごしま黒豚証明証が添付され、同協議会の指定する販売指定店にのみ流通しており、その肉質の良さとともに、生産者の責務を明確にしていることで、流通関係者や消費者からの高い評価を得ている。

(4) 「かごしま黒豚」としての出荷以外にも、当経営の生産する黒豚に惚れ込んだ 2 つの業者から産直取引の申し出があり、年間約 1,240 頭を出荷している。

産直取引の 1 つ目は神奈川県 of 業者で、「銀河連邦経済交流」を通じて、当経営の黒豚に大変惚れ込み、産直取引の申し出があり、平成 18 年から年間約 240 頭の産直取引を開始している。

産直取引の 2 つ目は大阪府の業者で、同じく経営主が生産する黒豚に惚れ込み、業者より従来のかごしま黒豚の枝肉重量を大きくすることにより甘み・うまみ成分を引き出す特徴ある豚の産直取引依頼があった。そのため、取引先のニーズに合わせて、「熟成豚」の産直取引を平成 21 年から開始し、現在は年間約 1,000 頭の産直取引を行っている。2 つの産直取引ともに大変好評で取引先から絶大な信頼を得ているが、経営主も産直取引先の販売会等にも出向いて消費者ニーズの調査を実施するなど、消費者の求める豚肉生産に前向きな姿勢で取り組んでおり、一層の高品質な豚肉生産が期待される。

5) 環境保全対策

(1) 平成 9 年に畜産環境整備事業 (県単事業) で堆肥化処理施設および浄化処理施設を整

備した。

ストール舎・分娩舎・離乳豚舎・子豚舎・肉豚舎はすべてスクレパーでふん尿分離し、分離された固形分はショベルローダーでパドル式堆肥舎へ送り、堆肥化処理されている。

分離された汚水は原料槽でいったん貯留されたあと、2つの沈殿槽で汚泥を沈降させ、上澄みを3つの曝気槽で間欠曝気を行い、上澄みを最終沈殿槽に送る。最終沈殿槽からの上澄みは、放流基準値 BOD90ppm、SS100ppm、大腸菌群 3,000 個/ml以下に処理されたあと、放流水をさらに水草の生えた自然浄化用の池に通して、川に放流しているなど環境保全対策には万全を期している。

- (2) 完成した堆肥は、種雌豚・種雄豚に給与するために作付けしているイタリアングラス・ローズグラスの自給飼料畑や果樹園、自家菜園などに還元利用し、残りは近辺の耕種農家に無償で譲渡しており、耕畜連携を図っている。
- (3) 畜舎周辺には景観と災害防止を兼ねて椿・せんだんを植樹し、また、畜魂碑の周辺には金魚草を植えるなど、農場の環境美化にも積極的に取り組んでいる。

5 地域農業や地域社会との協調・融和のために取り組んでいる活動内容

- 1) 有限会社黒木養豚は、地元地域および地元住民に対し、これまで順調な養豚経営をすすめてくれた感謝の気持ちから平成 19 年に町へ訪問介護巡回車を 1 台寄贈した。
- 2) 肝付町認定農業者養豚部会の一員として、家畜保健衛生所の指導のもと開催される自衛防疫研修会等にも参加し、防疫対策を積極的に行い、自衛防疫や生産性の向上を図っている。また、当部会では、町内の農協系・商社系すべての養豚経営者が一同に研修と交流を図ることで、お互いの飼養管理技術の研鑽や情報交流、および地域一体となった防疫体制の確立の一役を担っている。
- 3) 先述の「銀河連邦経済交流」に取り組んでおり、お互いの特産物販売の一環として黒豚の産直取引を開始した。また、平成 19 年からは毎年開催されている「相模原市市民桜祭り」に黒木養豚の黒豚を鹿児島黒豚じゃんぼ串として提供し、宣伝販売および消費者との交流を行っており、毎回大行列ができる肝付町自慢の一品となっている。平成 22 年には、県経済連、(株)JA 食肉かごしま、鹿児島きもつき農協、肝付町など関係機関の人員協力もいただき、2日間で 1400 本の串を販売した。
- 4) 郡内の JA グループ養豚経営者の後継者 19 人で「豚豚倶楽部」を結成し、豚豚倶楽部の会長として3ヵ月に1回のペースで、養豚関連ルートなどの視察、お互いの飼養管理技術のビデオ撮影による勉強会、研修会、交流会等を実施し、郡内の後継者のリーダーとして活躍しながら自己の経営改善に取り組む姿勢は地域の養豚農家の模範となっている。

- 5) 地元の養豚経営者で組織する「JA 鹿児島きもつき高山養豚部会」の一員として、研修会や勉強会等の開催のほか、毎年開催される「やぶさめ祭り」と「農業祭り」へ参加し、かごしま黒豚の美味しさを地元の方にも味わっていただき、地産地消の推進と消費者との交流および畜産への理解について積極的に取り組んでいる。
- 6) 「綱男士」という組織にも加入している。この組織は肝付町の養豚農家、肉用牛農家等の畜産農家に限らず、たばこ農家、果樹農家、園芸農家等の町内の農業者 30~40 代の若手農家で組織され、他分野農業者間の勉強会や交流により、幅広い視野・考え方を取り入れている。
- 7) 肝付町の消防団に入団しており、地域の安全のために積極的に活動している。
- 8) 隣町の東串良町の遊漁船組合の会員として、地元海岸の美化を守るため、清掃作業等の奉仕作業を毎年実施している。

6 今後の目指す方向性と課題

- 1) 現状の規模を維持し、家族・従業員一体となって、更なる飼養管理技術の向上による所得の増加を図りたい。
- 2) 黒豚の品質にこだわり愛情を持って育て上げ、絶大な信頼ある産直を実施できている状況にあるが、この信頼を損なうことなく、様々な養豚情勢や価格情勢に左右されない安定した生産基盤を維持していきたい。
- 3) 信頼の得られる高品質な種豚を整備・改良し、種豚販売（指定種豚場）を目指したい。
- 4) 養豚経営を長期的に展開するには、今後も環境保全はより重要な課題となってくる。家畜ふん尿処理施設は平成 9 年に完備しており、周辺住民との調和もとれている。また近辺に耕種農家も多いため、堆肥は無償で譲渡しているが、更なる調和および耕畜連携を図るためにも好まれる堆肥作りを行いたい。
- 5) 養豚経営を通じて地域社会へ参加し、さまざまな活動をしてきたことでその必要性を実感した。引き続き家族それぞれが現在の役割を担いつつ、地域社会への感謝を忘れず地域とともに歩いていける養豚経営を目指したい。
- 6) 目標として、豚肉の刺身を食卓へ届けられるくらい安心・安全で絶大な信頼のある豚肉作りを実現したい。また、そのためにも徹底的な防疫体制のチェックおよび農場の清浄化を維持していくことが今後の課題である。

【写真】



豚舎はすべて手作りによるコスト低減



全頭分娩看護によるつぶのそろった哺乳子豚たち！



種雌豚の移動時は蹄の先まで徹底洗浄



緑餌の給与により良好なボディーコンディションの維持



浄化処理施設で放流基準値以下に処理後、さらに自然浄化し、環境保全対策は万全！！



町へ訪問看護巡回車を寄贈



ニーズに応えた信頼の産直取引



パック肉に貼付された金シール「黒木さんの黒豚」